

JICA シニアボランティアのフィジー通信1

日本は猛暑で熱中症の患者がでているとフィジーのテレビ（NHK world）が伝えていきます。フィジーに着任した1月から4月にかけては、日本の猛暑日を超える強い陽射しを感じるが多かったのですが、7月の平均気温は一年で一番低い23℃（18℃～28℃）で、過ごしやすい日々が続いています。ちなみに一番気温が高いのは1月から4月で、平均気温は27℃（22℃～31℃）となっています。フィジーは「常夏の楽園」と称されますが、実り豊かな果樹や挿し木ですぐに葉をつけ繁茂していくキャッサバ（ダロ芋と並ぶフィジーの主食）、それに美しいサンゴ礁の海を見て、またフィジーの冬である7月の温暖な気候を経験して納得しました。

パパイヤとヤシの木には、数回の開花分の大小の果実が鈴なりしています。パンの木やマンゴウの木では数回の開花分の果実が同時に実ることにはないようですが、実り豊かな木であることに変わりはありません。マンゴウの木はいたる所にあって、首都のスバでも幹周り3m前後の巨木を何本も見ることができます。マンゴウの木が巨木に育つことには驚かされました。パパイヤの木は空き地などにも見られ、収穫されることなく落果してしまうマンゴウやパパイヤの実も多いようです。

パンの木の実は甘みの少ないサツマイモに近い味で、大きさはりんごの「世界一」より少し大きいと感じました。ダロ芋は味も食感もサトイモに近いと思いますが、キャッサバの味と食感は甘みの少ない栗だと表現しておきます。スバではどのマーケットでも米が入手できるので、ご飯を主体とした食事をしていきますが、隣国トンガに赴任したボランティアからは、毎日ダロ芋の食事を続けているとのメールがきました。

今回はフィジーで見かけた動物について報告したいと思います。鳥取県の「かにっこ館」に情報があるかどうか知りませんが、海岸で見つけた跳ぶことのできるカニの情報などをお伝えしたいと思います。



ヤシ



パパイヤ



マンゴウ



パンの木

JICA シニアボランティアのフィジー通信 2

スバ（首都）で最もよく見かける動物は犬を除くと、マイナと呼ばれる小鳥とマングースでどちらも外来種です。マイナは1904年までに原産地のインド及び東南アジアからフィジーに害虫駆除のため移入され、マングースは1870年頃にカリブ海の島々にげっ歯類を生物コントロールするため移入されたようです。マングースは1883年にハワイに移入され、その後にフィジーにも移入されたとインターネットにでています。マイナはあまり人や車を恐れず、道路で餌を探している時は、人であれば2,3m位に、車であれば1m位に近づくまでは逃げません。マングースはそれよりは用心深く、7,8mまで近づくと逃げていきます。マングースの写真は、排水管に身体を隠し辺りの様子を伺っているところをアパートのベランダから写したものです。

フィジーは通り雨が多いのでしばしば虹を見ることができます。夕焼けの空にでた虹を写真に撮ったところコウモリが写っていました。夕方になるとフルーツコウモリがアパートの近くを毎日飛び交うので、何度か写真に撮ろうとしたのですが、うまく撮れなかったのに偶然撮ることができました。フルーツコウモリは翼を広げると1.5mにもなる種類がいるそうです。写真のコウモリはそれほど大きくはないものの、伝書バトよりは大きいと思います。

スバは緑豊かなところですが、昆虫が非常に少ないと思います。ただしそれは私が自然豊かな鳥取県で暮らしていたから感じることもかもしれません。JICAのボランティア等には昆虫が少ないという私に同感する人もいますが、中にはフィジーは昆虫が多いという人もいます。昆虫が少ないことの証となると思うのは、スバでは屋外に張ったクモの巣を見たことがなく、国際空港のあるナンディーで一つだけ見たことです。昆虫が少ないためクモがあまり繁殖できないのだらうと思いました。トンボや蝶、バッタも見かけますが、種類も数も少ないようです。

インターネットで「カニ、横這い、歩き方」等をキーワードに検索すると多くの情報がヒットします。このなかで、東海大学海洋科学博物館の「海のはくぶつかん」2001年5月号の記事はカニの歩き方に関して解説しています。しかし、跳ぶカニについてはこの解説には見られないし、いろいろさがしても見つかりません。わずかにハワイのghost crabがときどき走る代わりにジャンプするという記事を見つけただけです。フィジーの首都スバにある南太平洋大学のキャンパスが接する海岸では跳ぶカニ（ミナミイワガニ？）を見ることができます。写真は干潮時に現れる岩の塊まりに向かって岸の方から跳ぶ寸前のカニを写したところです。撮影直後にこのカニは40cm程を跳んで岩の塊に登り、餌を取る行動をしていました。残念ながら写真ではその動きの全体を伝えることはできません。カニが岩の塊に向かって跳んで手前の海面に着水し、「水切り」で小石が水面を跳ねるように、水面を跳ねていくところを動画として撮っていますので、帰鳥した折に紹介できるかもしれません。

また南太平洋大学のキャンパスの近くの海岸では、黄色いハサミのシオマネキを見ることができます。初めてこのカニを見たときは黄色い花びらが海岸に落ちていると思ってしまいました。





JICA シニアボランティアのフィジー通信 3

南太平洋大学

ボランティア活動の拠点である南太平洋大学について、そのホームページに記載されている内容からの紹介です。同大学は赤道付近の太平洋のヨーロッパの面積の 3 倍以上の海域に散在する 12 の島国の政府によって設立されている大学です。これらの島国の面積の合計はデンマークの面積にほぼ等しく（九州の面積にほぼ等しい）、人口の合計は約 130 万人（最も少ないトケラウは 1600 人、最多のフィジーは約 83 万人）です。これらの国の中には、地球温暖化に関連してよく知られるようになったツバルが含まれています。メインのキャンパスはスバ(フィジーの首都)にあります。トケウラやツバルを含めて全ての国にキャンパスが設置されているそうです。スバのキャンパスはリゾート地を思わせる程緑に囲まれています（キャンパス 1, 2, 3）。キャンパスには職員用の住宅があり、幼稚園も設置されています。

ラグビー

フィジーでもっとも盛んなスポーツはラグビーです。フィジーの人口は 83 万人程ですが、1 億 2 千万人の中から構成されたラグビー日本代表チームを凌ぐ実力を持つチームがあるようです。しかし、インターネットの情報では、2006 年から 2007 年の男女合計の競技人口は、日本が 12.5 万人（約 1000 人に対し 1 人）に対しフィジー 8.7 万人（約 10 人に対し 1 人）となっていますので、フィジーラグビーの実力が日本ラグビーの実力を上回ってもそれほど不思議ではないのかもしれませんが。国の人口に占める先住のフィジー人は 57%、インド系住民 37%その他は 6%(2007 年調査)であり、インド系住民がラグビーをしているのをあまり見かけないことから、先住のフィジー人がラグビーに対してどれほど熱狂的か推察できると思います。写真の南太平洋大学ラグビー場（キャンパス 4）では同時に 2 試合ができますし、アパートの近くの公園では同時に 4 試合のラグビーが行われることがあります。

キャンパス 1



キャンパス 2



キャンパス 3



キャンパス 4



シニアボランティアのフィジー通信 4 (フィジーの交通事情) 8月27日

フィジーには主要作物であるサトウキビを運搬する鉄道はありますが、旅客を乗せる鉄道はありません。公共交通はタクシーとバスです。

市内を走るバスの乗車口に扉は無く、多くのバスには窓枠だけで、窓は付いていません。バスには冷房装置がないので、窓のないバスのほうがむしろ快適です。雨のときは窓枠の上にあるビニールシートを下ろします。降車時は窓枠の上に張ってある紐を引っ張って運転手に知らせます。この紐が日本のバスの降車ボタンの役を果たしているのです。

市内のバス停の間隔は短く、多くの場合 200m 以下 (100m 程度のところもある) の距離で次のバス停に着きます。さらに乗車する意思を示す人がいるとバス停でない所でも止まるので、停留所付近でバスを見てもバス停へ走る人は見ません。便利だと言えますが、発進時には目に見える排気ガスを多量に撒き散らすので困ります。

運転手に乗車券を要求しないのは違反で、乗車券の提示を求められた時に提示できないと、50 ドル (約 2500 円) から 500 ドルの罰金を科せられることがある旨、フロントガラスに掲示されています。市内のバス料金は 70 セント (約 35 円) ですから、罰金の大きさが分かります。半年以上バス通勤をしています。乗車券を要求する人を見たことはありません。私も乗車券を要求したことはありませんが、一度だけ乗車券を渡されたことがあります。バス料金は開放された箱や運転手のポケットに保管されるので、乗客が乗車券を受け取らないと、運転手が不正を行う気になればそれを防ぐことはできないでしょう。

ある日バス停で通勤バスの到着を待つ 5 分ほどの間、目の前を通り過ぎる車を数えたところ 100 台を越えました。約半数がタクシーで、残りの約半数が乗用車とトラックが 3 台でした。タクシーの数が非常に多いと感じます。タクシーの多くは日本車で、なかにはエアスポイラーが付いた車や、日本のタクシー会社の名前が書かれたままの車もあります。乗用車に比べてタクシーには年式の古い車が使われているのが良く分かります。

スバでのタクシー初乗りは 1.5 ドルで 6km 前後乗車したときの料金が 3 ドルだったのと、ガソリン価格は日本と大きくは変わらないということですから労働対価は非常に低いと思います。スバのタクシーにはメーターが付いていますが、国際空港のあるナンディーではタクシーにメーターが付いていないのは普通のことのようで、発車前に料金の交渉をする必要があるようです。私も運転手が 8 ドルと言うのを 6 ドルにしてもらったことがあります。ホテルで従業員に尋ねたところ、私が乗車した区間であれば 7 ドル程度だろうと言っていました。スバよりは割高の料金のようにです。

バスとタクシー



バスの車内



シニアボランティアのフィジー通信 5 (カバ) 9月1日

カバとはヤンゴナという植物の根を粉にしたものを水で濾した、フィジーの日常的飲み物です。粉の入った袋が繰り返し水に浸されては搾られ、日本人が泥水のようにだと表現することの多いカバを、喜んで飲む日本人は少ないようです。わたしも JICA 事務所から生水は飲まないように注意されているのと、美味しいと思う飲み物ではなかったのが、勧められて飲むことがあっても、積極的に飲む気にはなりません。

しかし、勧められた一杯のカバを飲まないのはフィジーに対する侮辱になるという記述も見受けるほどですから、心は複雑です。私はフィジー着任の歓迎会のほか 2,3 度カバを飲んだことがあります。写真はその歓迎会の席で、歌や踊りを披露してくれたグループのメンバーによってカバが搾られているところです。こうしてできたカバがヤシの殻で作られた器でふるまわれましたが、同期のボランティア全員が緊張した表情で飲み干しました。

カバにはアルコール飲料とは逆に気分を沈みこませる働きがあるそうです。ナンディのホテルでカバと音楽演奏を楽しんでいたグループが、演奏を終えるごとにシーンとしてお通夜のような雰囲気でもカバを飲み続けていたのが印象的でした。この時は勧めてくれたカバを断ったのですが、険悪な雰囲気になることはありませんでした。



シニアボランティアのフィジー通信 6（土曜日の市場と物乞い） 9月13日

市場

JICA のオリエンテーションで日曜日の午前中はなるべく出歩かないように教えられました。人々が午前中を教会で過ごしているので人通りが少なくなり、金持ちと見られがちな日本人はひったくりなどの犯罪に遭う可能性が高くなるそうです。しかし、午後になっても人出はなく、ほとんどの商店は閉じています。

かわりに土曜日は人出が多く魚市場や野菜市場も賑わいを見せます。野菜や魚はスーパーマーケットでも手に入るのですが、種類の多さや価格が幾分安いこともあって、市場に出かけることも多くなります。しかし地面に並べられたり、流しのような台に日差しが当たった状態でならべてある水産物を見ると食欲がそがれ、6ヶ月の間に魚とシャコガイをそれぞれ1度購入したに過ぎません。それでも市場で売られている水産物の種類に興味を惹かれて出かけています。

野菜市場には結構大きな建物がありますが、市場は建物の周りにまで広がっています。野菜の育ちもいいたらと思うのですが、たまねぎ、トマト、大根は日本のものに比べると小さなものしか見たことがありません。

物乞い

土曜日には通りに物乞いの人の数が多くなります。物乞いの人は人通りの多い歩道に立ったり座ったりして、手や硬貨の入った缶を差し出しています。通行の邪魔にはなっているのですが、邪魔者扱いする人を見かけたことはなく、硬貨をあげている人をよく見かけます。

しかし、国際空港のあるナンディー市で、物乞いで得たお金でアルコール飲料を飲んでいる人がいるとして、警察が排除する動きをしたという新聞記事を見たことがあります。

物乞いの人に占める先住フィジー人の比率は低いと思います。フィジーの政治には大酋長会議が重要な役割をもっていると聞きました。酋長という言葉からは部族の結束（密接な親戚関係）を連想します。着任時のフィジー語の研修では、先住フィジー人の親戚関係は複雑だと教えられました。先住フィジー人に物乞いの人の比率が低いことに、複雑に関係する親族が影響しているのでしょうか？子供の頃に比べると親族の関係が薄くなった私の生活を反省する材料になりそうです。

魚市場(マングローブガニが見えます)



屋外の野菜市場(キャッサバが見えます)



シニアボランティアのフィジー通信 7 (バリントニアの花) 9月16日

ブーゲンビリアやハイビスカスは有名ですが、広く知られているとは思えないきれいな花が、フィジーには数多くあります。

写真は南太平洋大学のキャンパスで撮ったバリントニアの花です。木に咲いているときもきれいだったのですが、地面に落ちていた花があまりにもきれいに見えたので写真に撮りました。バリントニアという名前は写真に撮ったときには知りませんでした。キャンパス沿いの干潟を歩いていたときに不思議な形の木の実を見つけ写真に撮りました。この実が地面に落ちていっそうきれいに見えた花が実ったものと分かって興味を惹き、名前を調べました。

バリントニアは海岸沿いによく繁殖し、その花も実もよく水に浮かぶといます。昔この実は魚を獲る網の浮きとして使われていたそうです。また、この実にはサポニンが含まれていて、砕いて毒流し漁にも使われるそうです。名前を調べたおかげで、この花が私の仕事の水産業に深く関係していることを知りました。

地面に落ちたバリントニアの花



干潟に落ちていたバリントニアの実



シニアボランティアのフィジー通信 8 (バイニマラマ首相) 9月19日

暫定首相

フィジーは 2006 年の無血クーデター後の政治の流れに基づく暫定政権によって統治されています。バイニマラマ暫定首相は国軍司令官としてクーデターを実行した人です。9月16日に南太平洋大学 (USP) で開催された中小企業の発展を目指す会議に、首相は主賓として列席していました。会場の内外に護衛らしき人は見当たりません。無血クーデターとはいえ、武力を背景にした首相が厳重な護衛を必要としないのは不思議です。

また暫定のまま任期が4年近くになっているのも不思議です。しかし、この間に暫定首相であるかのような任期で次々と交代した日本の首相とどちらがより不思議なのか迷います。

オニテナガエビ

フィジーはオニテナガエビ (大型の淡水エビ) の養殖振興に力を入れており、バイニマラマ首相は 2008 年にフィジーで一番大きいオニテナガエビ養殖場を訪れ、実情を視察しています。フィジーのエビ養殖業は中小企業に属していると思います。私はエビの養殖に関する仕事をしていますので、首相が開会の辞で養殖に言及するかどうか関心を持ちました。しかし、首相の開会の辞は簡潔で、養殖等の具体的課題に言及することはありませんでした。簡潔な開会の辞は、USP 学長による長い主賓紹介と対照的で印象に残りました。

演壇の向かって左が首相、右は学長
(立っている人は会場を撮影している)



シニアボランティアのフィジー通信 9(郵便) 9月26日

フィジーの郵便制度に各戸集配はないようです。JICAのボランティアへの郵便物はJICAのMail Bag(私書箱?)に配達され、JICA事務所を通じて各人が受け取るようになっていました。

先日家族から郵便小包が送られてきました。小包は郵便局に留め置かれ、JICAのMail Bagに届いた受取り催促状を持って受け取りに行くこととなります。催促状には、「検査が必要」、「送状が必要」、「隔離(検疫)が必要」といった意味の三つのスタンプが押されていました。これを見て小包の中身への期待と手続きの煩雑さへの思いが交錯しました。

またJICAのボランティアへの小包は赴任後6ヶ月は無税扱いされるのですが、その期間は過ぎているので税金の額も気にかかります。でも送り状に書かれた日から1週間を過ぎると、毎日保管料が積み重なると書いてあるので、翌日郵便局を訪れました。

催促状と身分証明書を示すと、係官から小包とカッターナイフを渡され、包みを解いて中身を見せるように指示されました。全ての中身が検査され、一人の係官が他の係官にマヨネーズが入っていることを知らせていました。鶏卵が没収の対象になるようで、鶏卵が原材料であるとしてマヨネーズが没収されたことがあると聞いていたので、一瞬没収されるかと思いましたが、全て持ち帰っていいという裁定になりました。

また中身の総額が低かったせいか税金も請求されず、手数料の2ドル40セント(100円強)で済みました。思っていたより簡単だったのでほっとして郵便局を後にしました。

小包の受取り催促状に押されたスタンプ

POST FIJI LIMITED
PARCEL NOTIFICATION AND DUTY ENTRY

8685

TSUTOMU MATSUMOTO
JICA
PRIVATE MAIL BAG
SUVA

EXAMINATION REQUIRED

INVOICE REQUIRED

13-SEP-20
Stamp

EMS

PLEASE PRODUCE IDENTIFICATION CARD ON DEMAND

For Managing Director Post Fiji Limited

DECLARED CONTENTS OF THE PARCEL

Description of goods	Office of Origin	Quantity	Value Declared	Postage on Parcel
DRIED NOODLES, ETC	JAPAN	4000	8900	

電動ドリル

大学院生が実験スペースを広げるために柵を作ろうとしていました。木材に電気ドリルで穴を開け、ボルトで固定する作業をしています。木材が硬いのか、なかなかドリルの刃は進まず穴からは煙が出て、穴の入り口には黒く焦げた鋸くずのようなものが見えます。

その場を離れてしばらくして再び行ってみると、ドリルのモーター部分が過熱したとして作業を止めています。あまりにも作業が進んでいないので、木材用ではないドリルの刃を使っているか、先端が欠けている刃を使っているのではないかと思いました。しかし、ドリルの刃が入っていたケースには、金属、木材及びプラスチック用と記されていて、刃の先端も欠けてはいません。

ためしにドリルの刃を回転させてみると、なんと穴を開けるのとは逆の回転をしています。回転方向を変えるスイッチを押して、ドリルを渡すと作業は順調に進み始めました。

院生は、ドリルの刃が回転していれば穴を開けることができると思い込んでいたのでしょう。私には電気ドリルを逆回転で使い続ける人はいないとの思い込みがあったと思います。私に思い込みがなかったら、穴から煙が出ているのを見た時点で、ドリルの刃の回転方向を確かめていたと思います。

電気ドリルを逆回転で使って木材に穴を開けるフィジー人の力に呆れ、JICAの職員が「フィジー人の力は強く、フィジー人が閉めた水道の蛇口を開けるには力が要る。」と言ったのを思い出しました。

グリーンフィールド

日本人が経験することの少なくなった裸足の感触を、鳥取方式による公園や校庭の芝生化が復活させているようです。フィジーの海を隔てた隣国ニュージーランドから来たスミスさんが、湖山池畔のグリーンフィールドから全国にこの方式を広めています。グリーンフィールドには、芝生と湖山池のすばらしい景観以外に何もありませんが、裸足が楽しめる素敵な公園です。私も犬の散歩によく利用して、スミスさんから芝生を裸足で歩くことを勧められました。

裸足

スバ(首都)にある公園や校庭は、グリーンフィールドの芝とは異なりますが、草に覆われています。そこでは裸足でラグビーを楽しむ学生などを多く見かけます。しかし、スバで裸足の人を見るのは公園や校庭だけではありません。街のにぎやかな通りでも見かけますし、裸足で通学する生徒もめずらしくはありません。私が住んでいるアパートの近くを裸足で歩く人は多く、若い女性のマニキュアをした裸足も見かけます。アスファルト舗装の表面に直径 1、2cm の小石が浮き出ている道を、彼らは平気な様子で走ることができます。また少し痛そうな歩き方ではあったのですが、直径 4、5cm の碎石が撒かれた路側を裸足で歩く人も見かけました。

靴磨き

裸足の生活には経済的な理由もあるのですが、履物を身につけるより快適な感触もありそうです。裸足の人を多く見かける一方でスバの通りには靴磨きの人も多く、靴の修理を生業としている人も見かけます。芝生や草の生えた公園などでのみ裸足の感触を楽しむことになる時代が、フィジーに近づいているのでしょうか。



写真1 中央に写っている人は裸足でした。
この人の後ろの建物の1階は衣料品店と電気器具店、二階は飲食店です。

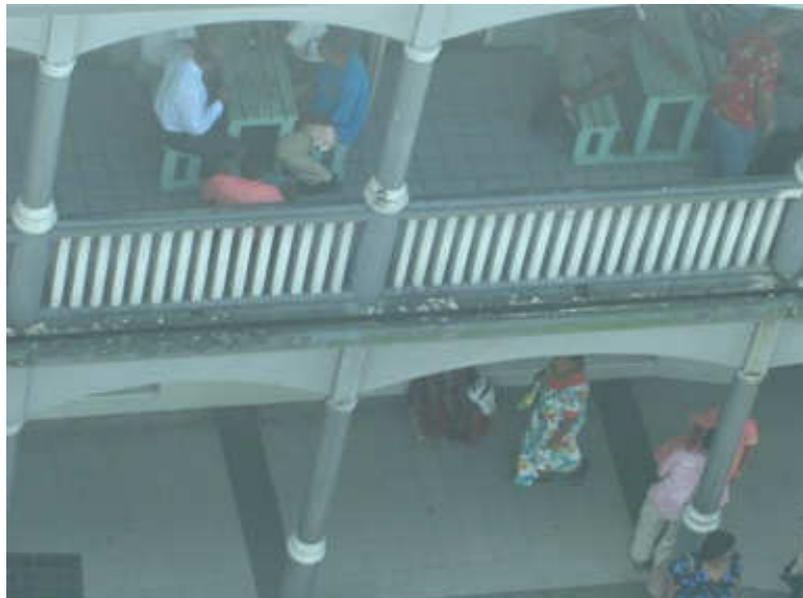


写真2 写真1で人が立っている付近を撮りました。
物乞いをしている人も写っています。

シニアボランティアのフィジー通信 12 (花火) 11月6日

光の祭

フィジーにはインド系の住民が多く、ヒンドゥ教徒の「光の祭 (ディワリ)」が10月又は11月に行われます。今年のディワリの祭日は11月5日で、この日の夜はイルミネーションと花火で飾られました。

花火

鳥取市のしゃんしゃん祭は千代川原の花火大会で盛り上げられますが、フィジーのディワリは各家庭の花火が盛り上げます。花火は通常午後5時から午後10時の間許可され、ディワリの休日には午後5時から午前0時まで許可されるようです。これに違反した場合、800 フィジードル (約4万円) の罰金あるいは2年以下の期間刑務所に収監される罰則があると、フィジー・タイムズ (フィジーの新聞) のオンライン・ニュースにありました。

家庭で楽しむ花火とはいえ、打ち上げ花火の中には夜空に大きく広がるものがあります。千代川原の打ち上げ花火よりは小さいのですが、日本の家庭用花火では見たことのない大きさの花火があるのです。

11月5日は夕方から花火の音が聞こえ始め、暗くなるにつれ頻繁になりました。家庭用とは思えない大きさの花火とあって、かなり遠くの花火の音も届いて、住んでいるアパートの四方八方が花火の音と光で満たされました。そして午前0時を過ぎても聞こえてくる花火の音がありました。

事故防止

花火はおもちゃではなく、危険を伴う商品であるとして、18歳以下の人は購入できず、業者は花火を18歳以下の人に販売したり与えたりしてはいけないことになっています。



住んでいるアパートのベランダから撮った写真。

同時に5~6箇所打ち上げられた瞬間を撮ったつもりが、うまく撮れていませんでした。右端に1mm程度の白い点として見えるのは遠くの花火です。

これまでシニアボランティアのフィジー通信として、私がフィジーで興味を持ったことを中心にお伝えしてきました。最終号で活動に関する報告をさせていただくこととして、本稿では鳥取県の観光資源である「ゲゲゲの鬼太郎」と砂丘に関連して、フィジーで興味を持ったことをお伝えしたいと思います。

境港では「水木しげるロード」の妖怪像が観光客を魅了していますが、「目玉おやじ」はよく知られたキャラクターの一つだと思います。南太平洋大学 (USP) のキャンパスにある木の実 (一枚目の写真) を見たとき、思い浮かんだのは「目玉おやじの木」というネーミングです。もちろんこんな名前はないはずですが、この木の実を見る度に「目玉おやじ」が思い浮かびます。一個だけ赤い色の実が見えますが、もう少し赤味が強くなると落果します。黒い瞳に当たる部分が種子です。盆栽仕立てで実をつけさせることができれば、「水木しげるロード」に飾るのにぴったりの木だと思います。



鳥取砂丘は何度も訪れていますし、遠来の客があると必ず案内する場所の一つです。フィジーにも、首都であるスバ市の西約 150km 付近に面積 650 ヘクタールのシガトカ砂丘国立公園があります。観光客が訪れる「鳥取砂丘」は鳥取砂丘の一部分で、インターネットの情報では面積が 545 ヘクタール程度ですから、シガトカ砂丘国立公園よりやや小さいようです。しかし、シガトカ砂丘を訪れたときの印象では、雑草や樹木に覆われていたシガトカ砂丘より、「鳥取砂

丘」での感動の方が大きいと感じました。

シガトカ砂丘でモダマというマメ科の植物の種子を数個拾いました。モダマは日本では屋久島、奄美大島、沖縄本島、石垣島、西表島、与那国島に分布するようですが、種子は漂流物として、九州や四国の他、太平洋側では茨城県でも、日本海側では福井県でも見つまっているそうです。

今年の4月にUSPのキャンパスの海岸にモダマの種子が多数打ち上げられているのを見つけました。4月から6月にかけて何度か拾い集めた莢（中に種子が入っています）で「SUVA」の文字を、種子で「Fiji 2011」を形どって写真に撮りました。SUVAの文字のSUは一連の莢の中間部分、VAは最先端部分と思われるものを使いました。インターネットで見るモダマの莢は数個から10個以上連なっているのに、拾った中間部分の莢と最先端部分の莢の数に大きな差はありませんでした。このことから莢がついたまま漂着する可能性は、最先端部分の方が高いと推定しました。推定の正否は分かりませんが、面白い現象です。



JICA シニアボランティアのフィジー通信 14 (ボランティア活動) 7月4日

フィジーでのボランティア活動が1年半となり、残りの任期が半年程になりました。そこで、私のボランティア活動についてお伝えして、私のフィジー通信を終わりたいと思います。

日本は「育てて獲る漁業」の栽培漁業に熱心ですが、世界はいわば「育てて食べる漁業」の養殖業に向かっているようです。たとえば2008年版の国連の食料農業機関 (FAO) の漁業と養殖業に関する資料によると、2006年の世界の漁業と養殖業の食用魚生産量は一億一千万トンで、そのうち養殖業の生産量が占める割合は47%です。そして2002年以後2006年まで、養殖業の生産量及び割合はともに毎年上昇しています。

中国ではテナガエビとオニテナガエビが大量に養殖されており、2007年の養殖生産量はそれぞれ19万トンと12万トンを超えています。オニテナガエビはベトナム、タイ、インドなどを原産地とする大型(雄の全長32cm、雌の全長25cm)の淡水エビで、世界中で養殖が盛んになっています。私の主なボランティア活動の目的は、フィジーでオニテナガエビ養殖を振興することです。

フィジーでは1980年にオニテナガエビの養殖試験が開始され1983年には種苗生産が開始されています。しかしながら1990年代以後、世界のオニテナガエビ養殖が急成長しているのに対し、フィジーでのオニテナガエビの養殖振興は足踏み状態で、その要因の一つは種苗が十分に供給できないことです。

この状況を打開しようと、オニテナガエビの種苗生産技術を改良して、安定的に種苗を供給することを目指して活動しています。オニテナガエビの幼生はゾエアと呼ばれ、ふ化直後は2mm弱の大きさです。このゾエアを1cm程度の大きさの稚エビまで育てることを種苗生産と呼んでいます。エビやカニが成長するためには、脱皮しなければなりません。オニテナガエビのゾエアは17回脱皮して稚エビに変態します。脱皮は、共食いや他の生物による食害の危険が大きい、エビやカニが克服しなければならない成長過程です。そして良好な種苗生産結果を得るためには、共食いを防ぐ等の技術が要求されるのです。

鳥取県の湖山池ではテナガエビが漁獲され、例年の漁獲量は2トン程度だそうです。フィジーでのボランティア活動で、種苗生産の難しさを再認識するとともに、中国でのテナガエビ養殖を参考に、湖山池で育った稚エビを種苗とした「獲って育てる」養殖業を検討すべきだと感じました。

添付した写真は3~4mmに育った種苗生産途中のゾエアです。黒又は茶色の点に見えるのがゾエアですが、密集したゾエアには共食いが起きやすくなっています。

